聚楽第行幸図屏風の修理―豊臣秀吉と堺―

宇野　千代子

1　聚楽第行幸図屏風の修理

堺市博物館蔵「聚楽第行幸図屏風」は、天正一六年（一五八八）の後陽成天皇の聚楽第への行幸を描く数少ない絵画資料である。戦国時代をテーマとした出版物への写真貸出や、展覧会への出品など、当館所蔵品の中でも注目度が高く、かつて当館『館報』Ⅷ（一九八八年）において当時の学芸員井溪明と辻克美が本作について詳細に論じている。論文中で、井溪は「本作は近年剝落止め等を含めた全面修理を行ったが、その際画面裏を含めて裏貼り等にも何ら屏風制作に関わる痕跡は見い出せなかった」と報告した。しかし、三〇年を経て修理や事前調査の技術は進展し、二〇一八年度に行った解体修理（有限会社墨仙堂）では、本紙裏面に墨書が見出されるなど、屏風制作に関わる情報が新たに得られたので、ここで改めて報告しておきたい。

屏風から本紙を剝がして裏打紙を除去したところ、各扇の本紙裏には、それぞれ二つずつ漢数字が記されていることがわかった［挿図1］。八番、九番、一一番、一二番という数字が記されるが墨で抹消されており、二番、三番、五番、六番と書き直されている。抹消された字と書き直された字とでは筆跡が異なるように見えるが、ともに筆致は粗く、過去の修理において屏風に貼り戻す時に順番を間違えないためのメモ書きと思われる。大きな方の数字が

挿図1　本紙の裏面

右隻右扇
「八はん」抹消有り
「二」「〇合印」

右隻左扇
「九はん」抹消有り
「三はん」「〇合印」

左隻右扇
「十一はん」抹消有り
「五番」「〇合印」

左隻左扇
「十二はん」抹消有り
「六番」「〇合印」

①「六番」「〇合印」

②「十二はん」抹消有り

抹消されていることは、本作が六曲一双（本紙一二枚）から、六曲一隻（本紙六枚）へと形態が変化したことをうかがわせる。すでに井溪論文において、絵のつながり具合や、四枚の本紙の寸法、手擦れの位置などから、本作が六曲屏風の第二・三扇、第五・六扇が残ったものである可能性が推測されていたが、この本紙裏の墨書から考えて、本作がもともと六曲一双であり、そのうち左隻の第二・三扇、第五・六扇が残ったものであることはまず間違いないだろう。このように形態が変化した理由は、傷んだ部分が取り除かれたか、あるいは何かの意図をもって改変されたか、いずれかであろう。

現存する四枚の本紙は、彩色や金雲の胡粉盛り上げ等に亀裂や浮きが生じていたが、修理前の調査によって本紙に大きな欠失はみられないことがわかった。とはいえ本紙の端の方は傷みによって生じた欠失が多く、別の紙で補修し、その上に絵柄を補って化粧直しの「補筆」をしている箇所もみられる［挿図2・3］。とくに天守閣が、裏側から見ると、本紙とは異なる黒っぽい紙に描かれているのが注目される［挿図4］。

改めて天守閣の描写を見てみると、筆線が他の部分に比べて細く不安定であり、入母屋屋根の瓦の線が放射状に引かれていることに気が付く［挿図5］。本作の他の入母屋屋根では瓦の線は放射状ではなく平行に引かれている［挿図6］。天守閣は補筆であろう。傷みやすい本紙の端に位置するということもあり、同じ位置に描かれていた天守閣の絵が損傷したため描き直された可能性が高いと思われるが、本来描かれていなかった所に描き加えられた可能性も考えておくべきであろう。

赤外線撮影では彩色の下の墨線を確認することができ、大幅な墨線の描き直しは無いことがわかった。彩色の指示と思われる墨書が見つかり、馬の房飾りの所に「しゆ」（朱）、首の所に「□□け」（馬の毛色を示す言葉か）と読める文字が見える［挿図7・8］。馬の房飾りの「しゆ」の指示書は他に三ヶ所見つかり、房飾りを朱色に塗ることに留意していたことがうかがわれる。

挿図 2
挿図 1 本紙の裏面③
本紙の欠失箇所に別の紙が補われている

挿図 3
挿図 2 の補紙への補筆
右側の 3 人のうち、上の 2 人が書き加えられている

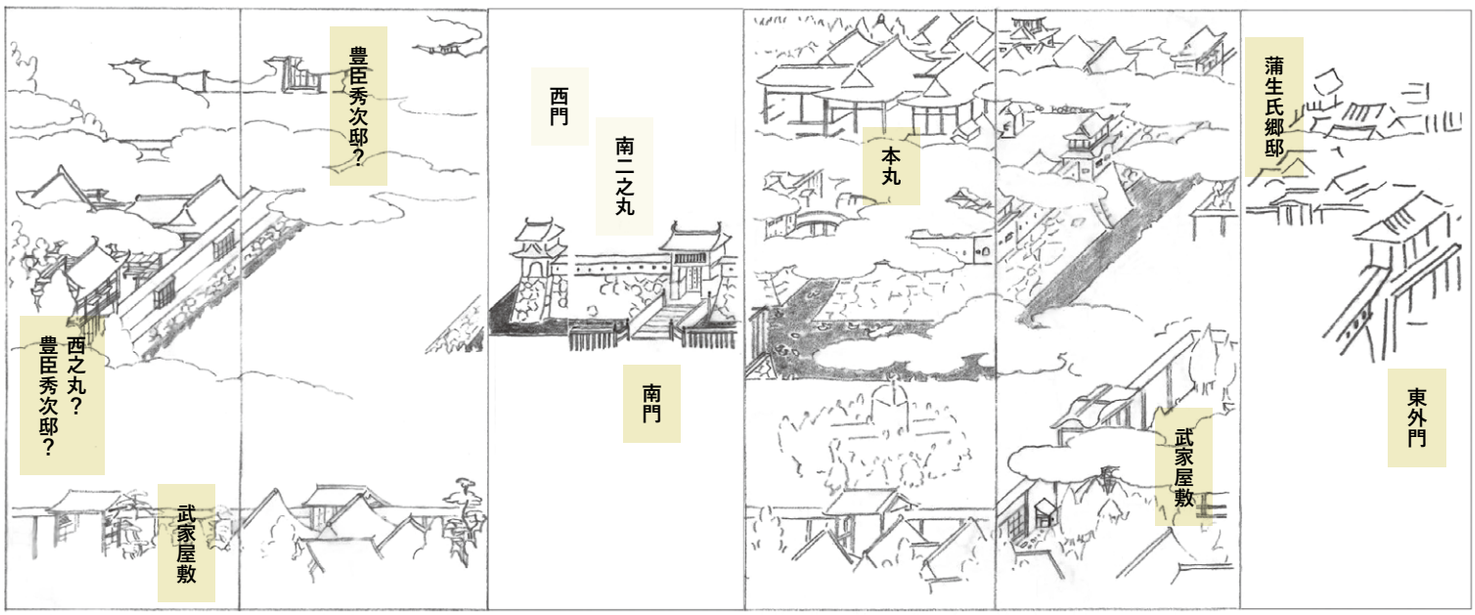
挿図 4
挿図 1 本紙の裏面④
右上に黒っぽい紙が補われている

挿図 5
挿図 4 の補紙に描かれた天守閣

挿図 6
櫓

挿図 7
馬（左隻右扇の中央）

挿図 8
挿図 7 の馬の赤外線写真
「□□け」「しゆ」



挿図 9
堺市博物館蔵「聚楽第行幸図屏風」復元案
第 1 扇は「探幽縮図」（東京藝術大学蔵）、第 4 扇は「瑞泉寺縁起」（瑞泉寺蔵）の聚楽第の図を参考にした

2　聚楽第行幸図屏風の復元案

本作の当初の姿はどのようなものであったのだろうか。聚楽第行幸を六曲一双の屏風に描いた作品としては、他に狩野永徳弟子の作というものの縮小模写（「探幽縮図」東京藝術大学蔵）が従来知られ、二〇〇九年には「御所参内・聚楽第行幸図屏風」（小林英好氏蔵　上越市立歴史博物館寄託）が新出資料として紹介された。二作はともに、左隻に聚楽第を配し、右隻側から左方向に鳳輦の行列が進むという構図を採る。鳳輦か、秀吉の乗る牛車か、いずれかを各隻の中心モチーフとしており、「御所参内・聚楽第行幸図屏風」では、右隻に御所から出発したばかりの鳳輦、左隻に天皇を迎えるために鳳輦とは逆向きに御所へと向かう秀吉の牛車を描く。「探幽縮図」では、鳳輦はすでに左隻の聚楽第に到着し、東の外門をくぐって聚楽第の外郭へ入ろうしているところであり、右隻に鳳輦の後に続く秀吉の牛車を描く。

堺市博物館「聚楽第行幸図屏風」では、鳳輦はさらに進んで、聚楽第外郭のなかを内堀に沿って進んでいる。進行方向はやはり右から左である。失われた第一扇には、先の二作がともに描く聚楽第の東の外門が描かれていたに違いない。第四扇には第三扇左端に見える柵に続いて南門が描かれていたと思われ、行列が進んでいる方向から考えると、南門の上方には西門が描かれていたと推測される。左隻には聚楽第の壮観が一隻にわたって展開していたのであろう［挿図9］。右隻には、鳳輦に随行する秀吉の牛車を中心に、御所から聚楽第へ向かう行列が描かれていたのではないだろうか。

3　秀吉の普請と堺

聚楽第行幸の一ヶ月前、宣教師オルガンティーノが一五八八年三月三日付で小豆島から書き送った書状の文中に、聚楽第と堺について触れた以下のような一節がある（松田毅一『豊臣秀吉と南蛮人』朝文社　一九九二年）。

［前略］
すべての大身たちが、今や（関白）から都に壮大きわまる宮殿（聚楽亭）

の造営を命ぜられて、（どれほど）異常なまでに苦悩したか、私は言うべき（言葉も）ありません。

［中略］

堺の哀れな市民、ならびにその都市は、頻繁かつ名状しがたい労苦と（重）税を絶えず課せられています。堺や都の市民で多少とも裕福そうに見える者に対しては、（関白）は都の外れに造った新宮殿（聚楽亭）の傍に新たな住宅を建てるように（命じました）。

［後略］

この書状が書かれた前年の六月、秀吉はキリスト教宣教師に国外退去を命じており、この書状は全体に秀吉への批判に満ちた内容になっているが、感情的な修飾語を差し引いたとしても、聚楽第の壮観を作り出すために堺がかなりの負担を強いられたことは疑いないだろう。聚楽第の周りには秀吉の近臣が屋敷を構え、千利休の屋敷も現在の晴明神社の辺りにあったとされるが、この書状は堺や京都の富裕な町人も聚楽第近くに新宅の建造を要請されたことを伝える。

堺の経済力は、聚楽第をはじめ数多くの普請を行った秀吉を費用の面で支えたと考えられる。また、秀吉は自らの居城の造営のみならず寺社の修復も行ったが、堺から費用が徴収された例として、信長と大坂本願寺の戦争に巻き込まれて焼失した四天王寺の戦後復興が挙げられる。四天王寺太子堂のために、堺代官の松井友閑に対して堺の地子銭から五〇〇貫文分を充てるように要求した秀吉の書状の写（天正一一年七月一一日）が残る（東京大学史料編纂所蔵「秋野家伝証文留」）。

堺の町にとってとくに銘記すべき秀吉の普請は、天正一四年一〇月二六日から一一月三、四日まで実施されたという堺の濠の埋め立てであろう。これを記した『貝塚御座所日記（宇野主水日記）』［本書三二頁　参考］は埋め立ての目的には言及しておらず、秀吉みずから訪堺してまで竣工を急がせたこの工事が堺にとってどのような意味を持つのか、議論を呼ぶところである。

この濠の埋め立てについて、『堺市史』（昭和五年）は「軍事上の堺がその価値を失ったと共に、それが住民の矜持を傷つけたことは如何ばかりであったらう」と記した。この解釈と誇り高い堺住民のイメージは、その後、歴史小説や歴史ドラマにも取り入れられ、濠の埋め立ては自由都市・堺の自由の終焉を象徴するできごととして一般に浸透した。ところが、堺の発掘調査が進み、町を囲む濠は、複数の時期に渡って埋め立てられていること等が判明した［本書65頁　15解説］。堺南庄と北庄の都市域として濠で囲まれた堺の町は、町中にも大小の濠が存在していたのであり、町の北の方には水はけの悪い地域があることから、排水のためにも濠が必要であった。濠の用途は防衛のみならず、運搬、地所の境界、用排水など多目的であったと考えられ、濠がすべて埋め立てられたとすれば、堺の住民は生活上、困ることになったであろう。秀吉による堺の濠の埋め立てについては、その目的と歴史的意義を再考する必要があるだろう。

堺の歴史においては、慶長二〇年（一六一五）四月二八日、大坂夏の陣の前哨戦で豊臣方が放った火で、中世から続いてきた都市・堺が全焼した時が、「中世」の完全な終わりと捉えられる。しかし秀吉の天下統一の過程で、大規模な普請によって堺の富は放出され、濠の埋め立てのいかんによらず秀吉の新しい城下町・大坂の発展に伴い、堺の都市としての位置づけは曖昧になっていったと思われる。すでに聚楽第行幸の頃には、堺は新しい時代の中にあったといえるのかもしれない。

（堺市博物館　学芸員）

〔参考文献〕

・井溪明「聚楽第行幸図について―本館蔵「聚楽第行幸図屏風」の紹介をかねて―」・辻克美「聚楽第行幸図に描かれた風俗―着用衣装を中心に―」『館報』第八号　堺市博物館　一九八八年
・白神典之「第二節　環濠都市「堺」の濠に関する二・三の問題」『堺市文化財調査概要報告　第六冊』堺市教育委員会　一九九〇年
・日本史研究会編『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』文理閣　二〇〇一年
・津田卓子「探幽縮図にみる聚楽第行幸図」『変革のとき　桃山』特別展「変革のとき　桃山」実行委員会・名古屋市博物館・中日新聞社　二〇一〇年
・「御所参内・聚楽第行幸図屏風」学術調査委員会編『「御所参内・聚楽第行幸図屏風」学術調査報告書』上越市教育委員会　二〇一二年
・山本雅和「聚楽第の遺跡と絵画資料」仁木宏編『日本古代・中世都市論』吉川弘文館　二〇一六年
・大澤研一『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』思文閣出版　二〇一九年

※挿図1～8の写真は、有限会社墨仙堂による撮影

豊臣秀吉と堺

発行日　令和三年五月二十九日
編集・発行　堺市博物館
〒五九〇－〇八〇二
大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町二丁　大仙公園内
電話　〇七二－二四五－六二〇一
デザイン　堀内仁美
印刷・製本　株式会社イチダ写真製版
株式会社サンエムカラー
堺市配架資料番号　1・L4・21・0102